

# 第六天魔王 草薙護堂

吉良吉影

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

草薙護堂は世界で7人目で日本初のカンピオーネである。  
しかし彼には秘密があった。

# 目次

魔王誕生	1
イタリアのの地にて斯く戦えり	7
神との決着、そして剣の王	12
未知の遭遇戦	16
そして魔王は呼び出される	21
媛巫女の謁見、アテナ襲来	25

## 魔王誕生

「今日は金稼ぎに行くかね」

この少年の名前は草薙 護堂。日本在住の身長179cmで体重は69kgの生粋の日本人だ。彼の足取りは軽く、向かった先はパチスロ専門店。彼の日課は学校が終わり次第、金稼ぎに行く事だった。そんな彼が4円のパチンコ、20円スロットを適当に打っただけで大勝ちしてしまうのだ。打たない理由がなかった。そう、彼は自分がギャンブルに強い事を知っていたからだ。

俺は二度目の人生を好き放題に生きる事を決意した。よくある神様転生とかでは無かったが、神様が真面目な俺にチャンスを与えてくれたんだと思う。

と、最初は思っていたが現実はず違った。

俺の名前は草薙 護堂。聞き覚えがある名前に妹の名前は静花で性格はつんでれだ。そして両親は父が蒸発して、母は女王だった。

完全にカンピオーネ世界に憑依転生ですね、ありがとうございました。

いつ死んでも可笑しくないカンピオーネの世界。でもそれ以上にこの世界に居る美少女達を抱きたくて仕方がなかった。可愛い正義。カンピオーネになれば、魔王の権力を使って美少女達と集めて、俺の嫁にしたい。そして俺は好き放題に生きてやると決めた。

勉強も部活動も全てが上手くいき、女関係を除く対人関係は特に問題が無かったと思う。女関係は彼氏持ちや先輩や後輩に關係無く手を出しまくって、寝取ったりセフレにして遊ぶ毎日。遊ぶ金が無くなればギャンブルに手を出して大勝ちするのが当たり前になって、着々と貯金が増えていくのが楽しかった。

「今日も諭吉が沢山」

草薙護堂はパチスロ専門店に閉店の22時45分まで打ち込んで遊びまくっていた。無事に換金を済ませて、自宅に向かう事にした。そしてその帰りの途中で不愉快な光景を見る事になる。

「ねえ、今から遊ぼう。又キ又キポンしようや」

「離してくださいっ！ 警察呼びますよ！」

髪の色は赤毛で、全身を和服の赤を主体としたコスプレ男が可愛い系の女性をナンパしていたのだ。それに女性は嫌がっていた。護堂は女の味方だ。ただし美人や可愛ければの話だが。護堂はこの女性の好感度を上げる事にした。そして今度、お礼をたっぷり貰うと決めたのだった。

「おい、その人嫌がつてるだろ。離せよ」

「なんだあ、お前。空気読めないのかよ」

コスプレ男は女性を掴んでいた手を離して、護堂と向き合う形となった。その隙に女性は一目散にこの場から逃げた。

「お前には勿体無いと思ったからな。ここでお前を叩き潰して、あの子を今度ナンパしたら俺がやれるじゃん」

「どうやら死にたいらしいな。望み通りに叶えてやるよ！」

コスプレ男が右手で持っていた赤一色の大剣を護堂に斬りつけようとした。しかし、護堂は持ち前の動体視力と反射神経に合わせて第六感のお陰で、余裕をもって回避できた。剣は護堂に当たらず、アスファルトの地面に突き刺さった。

「それ真剣かよっ！」

護堂は舌打ちをした。こんな場面は原作には存在しなかった。どうするかと考えるが、選択肢は一つしかなかった。殺さなきゃ殺られると。

「いい加減あきらめたらどうだ？」

「お前は馬鹿か！」

あれから護堂はひたすら避けては逃げてばかりだった。それには理由があり、護堂はひたすら河川敷を目指していたからだ。護堂は一心不乱に前に進むことしか頭になかった。

「ちよこまかと！ 逃げるなっ！」

「お遊びは終わりだ。ここから本番と洒落込もう」

そして数分後、遂に護堂は目的地の河川敷に辿り着く事が出来た。コスプレ男は護堂の自信満々の言葉を聞いて、身構える。

護堂は足元にあった小石を蹴り飛ばした。コスプレ男は咄嗟にその小石を大剣で防ぎ、護堂に対する警戒を強めた。

「なんだよ、今のは」

コスプレ男が疑問を抱くのは当然だった。何故なら、護堂が投げた小石は音速を超えていたのだからだ。

「考え事してんじゃねえよ！」

護堂は一瞬で、コスプレ男との間合いを詰めて殴り掛かった。大剣で護堂を迎え撃ち、確かに斬ったはずだったが大剣は護堂を斬ることが出来なかつたのだ。

コスプレ男の顔面に護堂のストレートが直撃する。内心やったか！と喜んでいたのも束の間。コスプレ男は倒れもせず、空いていた左腕で護堂を殴り返した。コスプレ男の腕力で護堂は1メートル以上吹っ飛ばされてしまったが、服と携帯以外は無傷だった。

「お前、魔王でもない人間のくせに随分と頑丈じゃねーか」

「魔王？ 何だそれ。頑丈さなら、お前も人の事言えねえよ」

そして護堂は分かったことがある。こいつ【まつろわぬ神】じゃね？と。

河川敷での戦いは決定打が欠けた戦闘だった。コスプレ男が大剣を全力で振るうが、護堂を傷付けることは叶わず。しかし護堂も殺意を込めて全力殴ったはずなのに相手は立ち上がってくる。

そんな拮抗した場にもう一人のコスプレした男が乱入してきた。金髪三つ目の肌はガングロで服装は、まるで黄土色の修行僧みたいな格好だった。

「ああ、ああ、ああ。何故を俺一人にしない。お前さえいなければ、俺

は幸福だというのに」

「げっ！ 糞兄貴じゃねえか！」

「消えてなくれや」

金髪三つ目の男は俺には目もくれずに、赤毛のコスプレ男に襲いかかった。そして護堂は今さら気付いた。この兄弟は兄のウンコマンと弟のパシリさんだという事に。

「これは殺るしかねえ。波旬死すべし慈悲は無い」

護堂は数秒だけ考えた結果、波旬を殺す事しか自分が生き残る道と世界がやばかった。

先程の戦闘で弟がやたら頑丈かも納得がいく。パシリは頑丈で不死身持ちなのだ。ただし怪我は治らないが殺せるわけがないのだ。それに比べて波旬の強さは通常のまつろわぬ神に落ち着いて、不死身では無い。しかしパシリが殺されてしまえばこの世の終わりだ。ラーマの出る幕なし。マリイが殺されて不愉快な想いをしたフアン の代わりに護堂が恨みを晴らすと決心した。

そして護堂はパシリさんに夢中な波旬を後ろから奇襲した。

「おりゃあー！」

護堂の蹴りは波旬の後頭部を捉え、パシリさんごと思いつきり吹っ飛ばした。

「テメエ、何しやがる！」

「痛い！ 痛い！ 痛い!?!」

波旬はただの邪神だ。額にある全てを見通す天眼は何も見えてはいない。本来の熊を撲殺する程度の力しか無い。武術の心得も無いと思いい、護堂は波旬を徹底的に攻めた。しかし護堂は気が付いていなかった。

護堂自身の攻撃や移動速度が音速を超えていた事を。護堂はパシリさんを無視して波旬の髪を握り、遙か上空に投げ飛ばした。

「ぐっ、があー！」

そして護堂も一瞬で上空に飛び上がり、波旬に踵落としを決めて地面に向かって叩き落とした。護堂は攻めに攻めた。地面に叩きつけられた波旬は身動きが出来ていなかった。そして上空から重力を利

用し、音速を超えて波旬に突撃してくる護堂の姿があった。

護堂は波旬に着地しても無傷だ。護堂は何故かは知らないが圧倒的なまでの怪力と頑丈さを身につけていた。

「オラオラオラオラ…」

波旬の顔面に怒りのオラオララッシュ。一撃一撃が揺れを起こすほどの重さ。

そして勝負は決した。弱体化をして、これといった特殊能力を持たない波旬はただの案山子だった。痛みにも弱く、押し切られる形となった。

護堂とパシリしかないこの場に女神が降り立った。その女神の名はパンドラ。

「さあ、皆様。祝福と憎悪をこの子に！ 七人目の神殺し。最も若き魔王となる運命を得た子に、聖なる言霊を！ ほら波旬君もだよ」

「好きにしろやあ？」

波旬は消え失せて、護堂は心身ともに作り変えられてゆく。しかしまだ終わりでは無い。

「まだ終わりにじゃないぞ、神殺し！」

「それじゃあ、いくぜ！」

護堂は本能のままに権能を行使した。それは元々、波旬の力を知っていたからだ。一人になりたいという畸形囊腫に対する殺意で自己強化を行う単純な力。それが波旬の持ち味なのだ。しかし、パシリと弟の坂上覇吐と相対すると元通りの強さに戻ってしまう。

権能はカンピオーネ毎にアレンジされるという。例えば、同じ神を殺したとしても同じ権能になるとは限らないのだ。

「生きているだけで、最高さ！」

護堂は本来の邪神ではなく、もし畸形囊腫を受け入れて他者と一つになりたいという波旬の力を行使した。

この権能は他者が存在すれば、自己強化をするというもの。しかしその自己強化が凄まじいのだ。護堂の謎の頑丈さを以ってしても身体が悲鳴を上げている。

「行くぞ神殺し！ 曙光曼荼羅…」  
「行くぞ！ 卍曼荼羅…」  
そして勝負がついた。

## イタリアのの地にて斯く戦えり

勝者は草薙護堂だった。他者という存在を肯定し、自己強化し続けた結果はまつろわぬパシリをワンパンしたという事だ。故に第六天波旬の弱点であった、弟の畸形囊腫の触覚と遭遇すると弱体化が、強化に変わるといふ仕様となった。

その後、護堂は無事に家に帰宅して風呂も入らず着替えもせず自室のベッドに飛び込んだのだった。

そして今日。彼はイタリアに飛行機で向かった。その理由は祖父が古い友人に物を届ける為だが、訳あって護堂がその役目を任されたのだ。

「身体中が痛いなあ」

と冗談は置いていて。飛行機の機内では爆睡をして原作通りにイタリアに来たわけだが、赤い服を着た金髪の美人が絡んできた。

「ねえ、そのの貴方。突然で申し訳ないけれど、お尋ねしたい事があるの」

「何々？ 逆ナン？」

「才色兼備の私が貴方みたいな冴えない男をナンパなんてするわけないでしょ。貴方と私では、まず釣り合わないわ。失礼しちゃうわね」  
「そんな冴えない男に何の用だよ」

冴えない男って言われたんだが。これでも一応日本のカンピオーネなんですけど。これは侮辱罪で魔王の権力を使ってSEXですわ。ヨツンヴァインにして犯してやる。

「三日ほど前からこの島の各地で顕現している【まつろわぬ神】について教えていただきたいの。私の名はエリカ・ブランデツリ。【赤銅黒十字】の大騎士よ。知らないとは言わせないわよ。怪しそうな魔術書

を持つてる時点でギルティよ」

魔導書を持つてるだけで怪しいとか気が早いよね？ 早くない？

まあ、いいや。未来の嫁だし多少はね？

俺が所持している物はプロメテウス秘笈と呼ばれる石板で、青い炎を当てると神力をかすめ盗る事ができる。原作の効果だったら対処の神と長く話し込んでないと使えない。アニメ版だと問答無用に奪うチート性能になってる。尺の都合だよ。なおどちらも人間が使用する瞬間脳髓や全身が沸騰するほどの苦痛を受けて、死亡する模様。俺は魔王だから大丈夫だ。

「話してる余裕はないみたいだぞ」

「え、何を言ってる…」

エリカの言葉を遮って突然、轟音が鳴り響いた。その理由は港から巨大な猪が町の建造物に突進を仕掛けていたからだ。そして猪が鳴き叫ぶと窓ガラスが割れて砕け散る。エリカは突然の出来事に立ち尽くしているけど、俺はカンピオーネの仕事をしようかね。

俺はその場で思いつきりジャンプした。そして空中で更に蹴る。ゲームの二段ジャンプ的な感じで猪に距離を詰めていって、加速したままの一撃。

「オラア！」

俺のワンパンを受けて、猪は悲鳴を上げて消滅した。所詮、まつろわぬ神の一部で神獣。この程度相手は問題ない。俺はその場に降りた。辺り一面は瓦礫の山で復興まで時間がかかりそうだな。

「御身は【まつろわぬ神】を弑逆した魔王陛下とお見受けします。これまでの度重なる無礼をお許しくださいませ。その償いとしては足りませぬが、我が命と引き換えに怒りを収めてはくれないでしょうか」

この俺に跪き、許しを乞う未来の嫁エリカ。原作護堂は余り権力を使いたがらなかったが今回は俺が護堂だ。魔王の権力を好き放題使ってやるぞ！

「エリカ。お前の命は要らないが別の条件がある」

「何なりと。魔王陛下」

「俺に剣を捧げ、俺の騎士となり、俺の嫁になれ。それが条件だ。その

条件を飲めば俺の寵愛をお前と結社に与えよう。もし条件を飲まなかった場合は手当たり次第に無関係な男共を殺すし、イタリアの魔術結社を壊滅させる。今、選択しろ。寵愛か破滅かを」

エリカに拒否権はない。俺は男に厳しい魔王だから問答無用でやる時はやるぞ。

「赤銅黒十字」大騎士エリカ・ブランデツリ。御身に剣を捧げ、愛と忠誠と誓います」

顔には感情を出さないがきつと屈辱を噛み締めていることだろう。でも逆らえない。俺が魔王なのだから。

「じゃあエリカ。このサルデーニヤ島で何が起こっているのか教えてくれ」

「はい。まずは…」

お互いの情報を共有する事にした。俺が軍神ウルスラグナと神王メルカルトが降臨しているというのは知っているが、取り敢えずエリカには現状を説明してもらった。簡単に言うならば【まつろわぬ神】が降臨しているという事。剣の王サルバトーレ・ドニが不在の為にエリカが島に来たという事を教えてもらい、俺が持っている魔道書を持ち主のルクレチア・ゾラの元に届ける為にこの島に来たということを伝えた。

「ルクレチア・ゾラの場所はご存知ですか？」

「これから探すつもりだったんだよ」

「ならば私が案内しましょう。車の運転は私の召使いにさせますがよろしいでしょうか？」

「それじゃあ、お願いしようかな」

護堂はエリカと行動を共にすることを決めた。最初は電車に乗ってルクレチア・ゾラの元に向かおうとしたが、エリカの海外の電車は時間にルーズという助言により、車で向かうことになった。

「彼女は私のメイドのアリアンナよ」

「初めまして。私はアリアンナ・ハママ・アリアルデイです。よろしくお願ひします。魔王陛下」

「こちらこそよろしく頼む」

「さあ、行きましょう」

「本当、道案内から車まですまないな」

「そうやって、護堂の旅は再開された。旅の車内ではエリカが魔王カンプイオーネの事や世界の裏事情などの説明をしてくれた。暴虐の魔王ヴオバンや世界最大宗派の十字教について。」

「そんな話をしていると数時間ほどのアリアンナのドライブを経て、目的地のルクレチア・ゾラの住処に着いた。」

「どう？アリアンナのドライブングテクニクは？」

「アトラクションみたいで楽しかったよ。初めての体験だった」

「お気に召して何よりだね。さあ、行きましょう」

二人は車から降りて、ルクレチア・ゾラの家の前でインターホンを鳴らす。反応が無かった。しかし外に居た黒猫が女性の声で喋り、護堂達は家の中に入っていった。

家の中に入ると、ルクレチア・ゾラが居た。しかし護堂は想像していた人物像とは違うものだった。祖父と40年以上前に出会っていたというのを聞いて、ヨボヨボのお婆ちゃんを想像していたが、その予想は裏切られる事になった。ヨボヨボどころか肌にツヤがあり、妙に色っぽい女性が薄着でソファで横になっていたからだ。

お互いに自己紹介した後、護堂はルクレチア・ゾラが最高位の魔女だという事を教えてもらった。そして若作りしている事も。

「実に驚いたぞ。真逆、一郎の孫が神殺しの魔王陛下になっていたとはな。人生とは面白いな」

「もつと俺を敬つても構わんぞ」

「それよりもルクレチア。この石版は何なのかしら？」

「おお、これは随分と懐かしいものだな」

エリカは護堂が持ってきていた石版の事を尋ね、ルクレチアは語り出した。

石版の名前はプロメテウス秘笈。ギリシア神話に登場する神を欺き人を導く偷盗の英雄神プロメテウスの神力を宿す神具であり、神の力を盗む魔道書。

その使い方は対象の神と長く接し、話し込めば神の力を掠めとる事が出来る。しかし、力の強い神にはま一部しか盗めない。

「私が管理するよりも、魔王である君に託そう。この魔道書を奪いに来る不屈きな輩も魔王の所有物なら手は出せまい」

「ルクレチア。本音は？」

「管理するのが面倒だ」

「思っても本人の目の前で口に出しちや、ダメでしょ！」

その後、時刻が6時を回ったので料理上手なアリアンナが料理を作る事になった。食事を食べ終わるとルクレチア、エリカ、アリアンナの女性陣が酒を飲み始め、エリカが酔い潰れて介抱する事になった。余談だが、ルクレチアが護堂とエリカを閉じ込めようとして失敗したのは言うまでもなかった。その後エリカ、ルクレチア、アリアンナの三人は護堂に美味しく頂かれた。

そして次の日。ルクレチアが神力の高まりを感知したので、護堂はその場所までエリカに送ってもらった。

「死ねよウルスラグナとメルカルト。まだ俺はアイツラとSEXしてたいんだよ！」

「何を言ってるのだ神殺しよ！」

「我らとの闘争よりも女だと！ 侮辱以外の何物でも無いわ！」

謎のプツンを起こした極東の魔王と、まつろわぬ神が激突した。

## 神との決着、そして剣の王

「生きているだけで最高さー！」

草薙護堂は今現在、二つの権能を所持している。第六天波旬・友情と黄泉帰りだ。友情の権能は波旬がドラマCDの様な存在で神だったらという他者が存在するだけで自己強化する権能。

そして黄泉帰りはその名の通り不死の権能だ。バラバラにされても再生などはしない。元々カンピオーネが持つ人間離れした回復力に頼るしかない。

しかし草薙護堂は昔からトラックに跳ねられそうになっても、ぶつかったトラックが大破するという頑丈さ。おまけに大人数と喧嘩して金属バットや瓶で殴られたとしても無傷なのだ。

「ほう、その力は！ お主は本来は存在しない神話の邪神を屠ったのだな」

「その身から溢れる呪力！ 益々高まる一方だ。手が付けられなくなるうちに倒してしまおう」

ここで問題。図体がでかいとどうなりますか？ 答え。当てやすい。ただのストレート。

「オラア！ 先ずは一体」

例え、オリジナルに劣るカンピオーネ版まつろわぬ波旬より更に劣る波旬の権能でもカンピオーネ世界では無敵に近い性能を誇る。

「お主の力は他者と繋がっているお陰で発揮できる代物。斬らせてもらおうか」

ウルスラグナが黄金の剣で護堂を斬りつけたが、護堂には一切のダメージは通っていないかった。

「何故だ！ 我が神を貶める黄金の剣が効かないなど！」

「当たり前前だろお？ 桁が違えば通用するわけ無いだろ。さっさと死ねや」

一瞬でウルスラグナとの距離を縮めて、腕を振るう。例え、直接攻撃を避けたとしても腕を振った圧で即死なのだから。

そしてその場に最後まで残ったのは魔王である草薙護堂だった。

よし！ これでメルカルトも叩き潰したから、わざわざシチリアの方に行かなくて済む。エリカとは正式に俺の騎士として認めてもらうために父親に話を通すらしい。その要求が確実に通る様に俺からも魔王としての権力で要請すると電話を一本入れておいた。

ルクレチアも俺の命令で日本に来る事になったが、家を片付けてから来るらしいから俺だけ一足先に帰国する。俺が日本に帰国する時に空港で厄介な人物と遭遇した。

剣の王サルバトーレ・ドニ。イタリアの魔術界の頂点。剣バカで戦闘狂に更にトラブルメーカー。

「僕の名前はサルバトーレ・ドニ。ねえ、君が7人目の同胞なんだよね？」

「そうだけど。何か用？」

「暇だから決闘しない？ きつと楽しいよ」

そう来ると思った。

俺の帝王三原則にはこんな言葉がある。

- ・ 退かぬ！ 媚びぬ 省みぬ!! 帝王に逃走は無いのだ！
- ・ 勝利して支配するツ！ それだけよ、それだけが満足感よ！ 過程や！ 方法なぞ！ どうでもよいのだ

- ・ 「帝王」はこのディアボロだツ!! 依然変わりなくツ！

俺はこの三原則をモットーに魔王人生を謳歌するぞ。

「ああ、いいぜ。ただし条件がある」

「その条件って何かな？ 僕に出来ることなら何でも、しようじやないか」

【赤銅黒十字】のエリカ・ブランデツリ、【青銅黒十字】のリリアナ・クラニチャール、サルデーニャ島の魔女ルクレチア・ゾラの所有権を俺に寄越せ。お前が許可すればそれでいいんだ」

「そんな事でいいの？ 別に僕は全然構わないよ！ さあ、早く戦お

う！」

イタリアの魔術界の盟主であるドニが許可を出せば、誰も逆らえない。そして俺がドニを倒せば更に俺に対する態度も変わるだろう。好戦的で女好きという最高の名誉を貰える。

「ヒヤッハー！ 剣バカは消毒ダア！」

魔王は何をしても許される。犯罪をしてもお咎め無し。最高だぜ！

俺はドニを殴り飛ばそうとして襲いかかった。ドニは高速で剣を抜き、俺の首を狙い迎撃してきたが篡奪したてのウルスラグナの権能の鳳を発動した。発動条件は高速の攻撃を受ける事。剣の達人であるドニの剣捌きのお陰で発動出来た。

一瞬で加速して、殴り掛からずにそのままタツクルに切り替えてドニと俺は空港の飛行場に飛び出た。

神速をオフにして、取り敢えず向き合う。

「後はお前をぶっ飛ばすだけだな」

「突然襲ってくるからビックリしたよ！ 君は何て面白いんだ！」

「笑ってられるのも今のうちだぞ。生きているだけで最高さ！」

俺はお気に入りの波旬の権能を発動した。ただ単純な自己強化が最も恐ろしい所を見せてやる。

「なんか、突然強くなったね。それが君の権能かい。なら僕も全力で相手をしないとね！ ここに誓おう。僕は、僕に斬れない物の存在を許さない！」

ドニから凄まじい呪力が右腕に迸り、銀色に染まった。ドニが持っていた安物の剣もそれに包まれて必殺の魔剣と化す。それがドニの権能。

そして俺は再び鳳の神速をオンにした。

「フーン！」

一気に加速して、殴り殺すという簡単な作業。ドニはもちろん迎撃してくる。腕から俺を切り裂こうとして入るのがわかる。しかし、無駄だ。波旬には通用しない。レベルを上げて物理で殴ればいい。

ドニの銀色に輝く必殺の魔剣が俺の拳と激突する。勝負は一瞬だった。俺の自慢の拳が剣を粉碎してドニの身体に到達した。狙いは心臓。

「手応えが普通と違う」

ドニの身体を見ると周りにルーン文字が展開されており、ドニの身体が鋼になっていた。ドニがジークフリートから篡奪した一定の不死性と鋼のような頑丈さが身につく権能。

しかし鋼と化しても致命傷を与えた。

「あれ？ 可笑しいなあ。まさかその拳が僕の魔剣も同じ種類だなんて」

ドニは吐血した。いくら鋼の身体になったとはいえ、殴られた心臓の辺りから全身に亀裂が走っている。

「この勝負、俺の勝ちだな。じゃあ俺は帰るわ！」

これでドニとの戦いも終わった事だし、次はアテナ。滾るなあ。

## 未知の遭遇戦

俺はドニとの戦いの後、イタリアの魔術結社に働き掛けて、飛行機を貸し切りにしてタダ乗りする事が出来た。魔王の権力って便利だわ。

CAを可愛い女の子という注文をしてたお陰で魔術で言いなりになっている金髪でそこそこ美女を犯して遊んでいた。それも高度が安定してから遊び出したから、既に何時間か経過している。

「やっぱり種付け最高だわ」

問答無用で何度も中出しをしてスッキリしていた時に異変は起きた。

「緊急事態が起きました！ お客様はシートベルトを着用し、上から出てくる道具を装着してください」

なんかマズイことになっている気がする。取り敢えず、魔術で言いなりになっている美女をシートベルトに固定して器具を装着させる。俺はこんな事で死なないからシートベルトだけは装着して待機していた。

「私が責任を持って不時着させるので、衝撃に備えてください！」

機長がそう言つて、機体を数十分飛行させて不時着を果たした。物凄く揺れて楽しかった。また乗りたい。

無事に不時着をして機長が点呼を取る。機長や副機長、CAと俺で合計4人は無事だった。

「何でトラブルが起きた？」

俺は千の言語で習得した英語で機長に尋ねた。

「突然エンジンが停止したり再起動を繰り返していて、訳が分かりませんでした」

機長になって数十年のベテランさんらしいが、こんな体験は初めてだという。これは怪しいぞ。新手のスタンド攻撃を受けている！

取り敢えず、機長が救難信号を出して救助待ちという状態。

しかし、嫌な予感がしたので機内から出てその辺りを歩いていると突然、轟音が鳴り響いた。

そして俺の身体の状態が切り替わる。リラックスをしていたのが、一気に戦闘態勢に移行したのが分かった。この様な状態になる状況は一つしか知らない。

神と遭遇した時だ。俺がそこで見た光景は？

巨大で西洋風な見た目をした黒龍。

黄金の鎧を身に纏ってまるで太陽の様に輝いている褐色の槍使いの男。

巨大なオウムの神獣に乗っている弓使いの男。

白い象に乗っているのは男で茶褐色の皮膚をしており、髪や髭は赤く染まっており、一面四臂で弓を二本の手で持ち、残っている二本の手で槍と変な物を持っていた。

「まつろわぬ神が四体だあ!？」

巫山戯るな。俺はこんな展開なんて知らない！ 波旬や覇吐が出て、ウルスラグナとメルカルトをワンパンして原作までの道程を短縮したと思えば、早過ぎたドニとの決闘。そして帰国中に飛行機が墜落して、まつろわぬ神が四体。

まるで未知との遭遇。俺の知らない物語。偶然にも程がある。

しかし未知ほど面白いものは無い！ それに神をブツ殺せば権能は増えて、俺は強くなる！ それに波旬を倒した俺に敗北は無い！

「クソツタレの神様よお！ その遊びに俺も混ぜてくれよ！ 俺の名は草薙護堂！お前等をブツ殺す魔王だ！」

一面四臂の神に対して黒龍が攻撃を加え、その黒龍を妨害して尚且つ黄金の鎧を纏った槍使いが攻撃を加えていた。残った弓使いは一面四臂の神の援護に回っている状況で俺は名乗りを上げた。すると戦闘行為は一旦中断される事になった。

「ほう。神々の王たる我に臆せず姿を現したか神殺しよ。しかし不敬であるぞ！我こそはインドラ！ 神々の王である」

一面四臂の神がインドラだとしたら、あの黒龍の正体は一つしかない。

「神殺しだとお？ 俺とインドラの戦いを邪魔する者は容赦はしない！俺は今日こそインドラを葬るのダァ！」

インドラの宿敵ヴリトラ。それも結構面倒な能力持ちだ。

「我がインドラを葬るのよ。貴様ではないヴリトラ！ 我が鎧を奪い、我が天に登る事になった元凶！ 怨みを晴らすのは我の特権！」

しかしその前に、神々の鬪争を邪魔する不埒者は排除しなければ」

黄金の鎧を身に纏った槍使い。インドラに鎧を奪われた奴は一人しか知らない。大英雄カルナ。

「全く無粋だぞ。今は神々の王たるインドラ様が反逆者を討伐している最中というのに神殺しときたら。空気も読めんのか」

誰だお前。俺はお前みたいなおモブ知らないんだよ！ オウムに乗る神とか知らんわ！

「取り敢えず。お前等、死刑な？ 神様死すべし慈悲はない！ 生きているだけで最高さ！」

俺の権能は他者が存在すれば自己強化。しかし今回は四体だから、その分強化が加速する！

「先ずはお前！ オウムに乗って偉そうにしやがって！ 死ぬ！」

だってムカつくし、それに弱そう。俺はオウムごと弓の神をぶち殺してやった。所詮ワンパンよ！

「何!? カーマを一撃で葬ったのか！」

誰だよカーマって！ 知らんぞ！ 後でwiki見るわ。

「神に仇なす神殺しよ！ 我が槍捌きをどくと味わえ！」

カルナの槍は卓越した技術と神速が合わさり、普通の人間なら即死だ。俺の場合は神速ぐらい見えてるし、避ける事も出来るが避ける必要がない！

俺は槍自体を握り潰した。

「槍が効かず、潰されてしまったか。しかし我は父から授かった黄金の鎧がある限り不死身よ！」

カルナは黄金の鎧があると不死身だ。カルナにはインドラから授

かった槍があるがそれを使うとインドラとの戦いがあるから、使わな  
いんだろう。

「でも、そんなの関係ねえ！ 野郎、ブツ殺してやるああ!!」

レベルを上げて物理で殴り殺せば問題無い。鎧を粉砕できる程の  
火力で殴り殺すだけ！

所詮はカンピオーネ世界の神。エロゲの神に勝てると思うなよ！  
別にカンピオーネ作品をデイスってる訳じゃあない。

「ドラララララララッ！」

波旬のドララララッシュ。クレイジーダイヤモンドは居ないが問  
題無い。カルナは鎧ごと粉砕してミンチにしてやった。

「あのスーリヤの息子が負けるだとお！我ですらあの鎧には勝てぬと  
いうのに」

「このままではインドラを殺されてしまうわ。俺がお前を殺してやる  
神殺しよ！」

ブリトラも厄介な能力持ち。その能力は木、岩、武器、乾いた物、  
湿った物、ヴァジュラのいずれによっても傷つかず、インドラは昼も  
夜も自分を殺すことができないというもの。更にナムチという奴が  
似たような能力を持っていた。ナムチの場合は掌や拳すら効かない。

突破方法はインドラのヴァジュラか泡で殺すしかないが、関係ない  
！メルカルトの権能が使えるから使うとするわ！

「我こそは、神王なり！ 嵐よ吹き荒れろ！ そしてヤグルシとアイ  
ムールよ！雷となり龍蛇を討滅せよ！」

俺の無尽蔵に沸く呪力を言霊に込めて、どんよりとしていた天気が  
変わる。突然、雷雲が辺り一帯に広がった。そして大雨。まさにゲリ  
ラ豪雨！

ヤグルシとアイムールは元々は雷霆だったが、その後に棍棒にされ  
た。今回は雷でブリトラを攻撃する。ヤグルシとアイムールは龍神  
を屠った武器だから蛇に特攻持ちだ！ それに自動追尾してくれる  
ぞ！

「貴様ア！ 龍を討伐した嵐の神から篡奪した権能だなあ!? 全く厄  
介だ！」

波旬で強化して雷となったヤグルシとアームールが、ブリトラにダメージを与えていたら数秒でブリトラ焼きが完成した。

どうやら波旬状態で権能を行使すると威力が跳ね上がるね。無尽蔵に呪力が湧くから権能行使の時に使いまくってるからね。

「残るは我だけか。貴様には我がヴァジュとカルナに譲ったシャクティを使うとしよう！」

ノーコストで神を殺せる槍をぶん投げてくるとか勘弁してくれや。それにヴァジュラも追加とか。まあ、効かないけどね。

インドラの神力が高まり、光り輝いている槍が現れた。インドラはその槍と手に持っていたヴァジュラを俺に向かって投げつけた。

「無駄アー！」

光と化した槍と雷撃と化したヴァジュラの攻撃を粉碎してやった。

「なんだとっ!？」

これには驚くしか無いね。まあ、殺すだけなんだけど。

「強靱！・ 無敵！・ 最強！」

「ふんっ！ まだ手はある！ 我は太古の昔に羅刹を葬ったヴィジャヤがある！ 別の名はインドラの雷とも矢とも炎とも呼ばれるがな」俺でも知っている。インド版核兵器。これはマズイ。俺は死なないけども第三次世界対戦が起こるかもしれない。

「投げさせるかよ！ 死ね！」

俺は地面を蹴り、インドラの元に向かってワンパンしてやった。レベルを上げて物理で殴り殺せばいい。

「あーもう、疲れた」

神々との闘争の勝者は草薙護堂だった。辺りにはその惨状が広がっている。

「あれ？ 雨止まなくなね？」

先程よりも雨風が強くなり、ヤバくね？と思っただけどどうでも良かった。

早くアテナを倒して服従させたいぜ！ その前にゴルゴネイオンを回収か。先は

そして魔王は呼び出される

草薙護堂はその後、無事に救助された。それから護堂は今度こそ日本に帰国したがエリカに電話でお願いをされてしまい、再びイタリアに飛行機で向かった。今度こそは墮ちるなど願いながら。

「お久しぶりです魔王様。お迎えに参りました」

「アンナか。ところでエリカは何処にいる？ あいつが魔術結社のトップ会談に参加してくれと頼んだから来たんだが？」

「申し訳ありません。エリカ様は会談の場所にて各魔術結社のトップの方々の相手をしております」

確か、俺が女神アテナの神具ゴルゴネイオンを預けるかどうかを見極める為に呼び出してエリカと戦わせるはず。どうせ勝ちはず確定しているから問題は無いけどね。

「じゃあ、その会談の方にさっさと行こう。全速力で飛ばして」  
「畏まりました」

そこで俺はアンナを走り屋と認定をせざるを得ないドライブを楽しむ羽目になった。公道で80キロで爆走する事、数十分。目的地である【赤銅黒十字】の本部の正面玄関口に到着した。

アンナがドアを開けてエスコートをしてくれた。

「私について来てください」

俺はアンナに案内されて、会議室みたいな所に通された。この施設はちよつとだけ中を歩いただけだがら気品と年代を感じさせ、正に高級感が溢れていた。

「お待ちしておりました。草薙護堂様」

「よう、エリカ。久しぶりだな！ それに知らない顔だらけだな」

「此方の方々はイタリアの魔術結社のトップの方々です」

ローマの【雌狼】【蒼穹の鷲】、トリノの【老貴婦人】、フィレンツェ

の【百合の都】、パルマの【楯】、ミラノの【赤銅黒十字】【青銅黒十字】の通称、七姉妹と呼ばれるイタリアの名門の魔術結社の総帥達が一堂に会していた。でもカンピオーネになれない人達。彼等からそれぞれ礼儀正しく挨拶をされた。

「それで、イタリアのお偉いさん方が俺に一体何の要？」

俺は威圧した。魔王の威厳を保たなければいけない。

「貴方に、つい最近引き上げられた神具を預けたいの。ここにいる方々はサルバトーレ卿との戦闘を空港の監視カメラで拝見しているのだけど、卿は傷の療養と修行すると言い残して出て行ってしまつて、私達は頼る王が居ないの」

要は俺に預かれと言ってるのか。俺は別に構わんけどな。

「本来なら莫大な金を要求するが、今回は特別に金は要らないが、それ相応の態度があるだろエリカ？」

「もちろん準備は万全です。リリイ」

すると扉が開き、銀髪のポニーテールの美少女が俺に跪いた。

「お初にお目に掛かります。極東の王よ。我が名はリリアナ・クラニチャール【青銅黒十字】所属の大騎士です」

「私もいるぞ少年。魔術結社のお偉いさんに呼び出されたと思えば君の仕業か」

「そして貴方の愛人で騎士であるエリカ・ブランデツリと彼女達は御身と共に行動させてもらいます」

リリアナにルクレチア。そしてエリカまで。調教のやり甲斐があるぞお！ 既に原作に可笑しな展開が混ざってるから、好き勝手しても問題無いだろう。

「ならばよし！ その神具は俺が預かった！ 任せとけ！」

俺はゴルゴネイオンを預かる事にした。そして話が変わって飛行機の墜落事故についてだ。

「王よ。あの飛行機には呪力で細工がなされていたようでした」

「お前達が俺を殺そうとした訳じゃあ、無いんだろう？」

「王が墜落如きで死ぬとは思いません。それで本題です」

まあ、死なないし気にはしないけども。

「どうした？」

「あの墜落現場の近くの荒れ果てた大地に膨大な呪力と神力が満ちていたのです。それに呪力の塊のような嵐。一体、あの場所で何があったのでしょうか？」

「本当、有能な霊視役がいると有能だわ。呪力を調べれば一発だからね。」

「そっちが想像している通り、まつろわぬ神と遭遇したぞ。ただし四体だけだね。あの嵐はメルカルトの権能」

俺の言葉でこの場がざわつく。普通は勝てる気はしない。他のカンプイオーネだったら良くて一体を道連れに相打ちで、悪くて敗北からの撤退で再戦ってパターンだと思う。だってヴリトラとカルナの鎧がえげつないから。各個撃破なら多分いけると思う。

まあ、俺は四体一で勝てるわけないだろ！ 馬鹿野郎俺は勝つぞ！ 的なノリで彼奴らぶっ殺したからなあ。

「少年。弑虐した神の名をお教えもらっても大丈夫かな？ 此方は神の数ぐらいいしか把握していないのでな」

「雷神インドラ、英雄カルナ、邪竜ヴリトラ、それと多分愛の神カーマだと思われる」

カーマは兎も角、インド神話のビッグネーム達。波旬の権能が無かったら確実に死んでいたね。

「それなら王は私と会った時は、祖国でまつろわぬ神二柱を弑虐したと言われていましたが、その後無事に軍神ウルスラグナと神王メルカルトを討滅してくれました。その時点で権能は四つだったのでですか？」

俺は肯定する。

「そうだぞエリカ。権能の詳細は教えないが、その後に四体をその場でぶっ殺したから合計で八個だ」

場の空気が凍った。俺は悪くない。

ちよつと待つて。俺、魔王に成り立てなのに権能の数が一番多くな  
い？ 短期間に神との殺し合い多すぎんよお

「グリニツジの賢人議会により、作成された七人目の王である草薙護堂についての報告書」

王が確認されたのはイタリアの地で現地の魔術結社の団員と遭遇した事で発覚した。そしてその後、その地に降臨していたまつろわぬ神、ゾロアスター教の軍神ウルスラグナとカナン神話の主神バアルの別名のメルカルトを弑虐したと報告を受けた。

しかしイタリアを訪れる数日前にまつろわぬ神二柱を弑虐したと語っていたらしい。そして祖国に帰国する際に、イタリアの魔術結社の盟主である剣の王サルバトーレ・ドニとの決闘。剣の王を一撃で制し、その日に王はビジネスジェットに乗り込み帰国していったが不慮の事故により墜落。その墜落現場付近で、なんと四体のまつろわぬ神と遭遇。その場で四体のまつろわぬ神を弑虐したと王自ら庇護を与えるイタリアの魔術結社に報告したらしい。

その神達の名は企業秘密との事。そして王は今までの弑虐した神々の権能を保持していると自己申告だが語っていたと自ら言うのだから間違いが無いだろう。この短期間でまつろわぬ神を八体弑虐した魔王は歴代でも類を見ない。

彼の王の愛人であり騎士でもある【赤銅黒十字】の大騎士であり【紅き悪魔】エリカ・ブランデツリから渡された報告書によれば、こう記されていた。「先に言っておくが俺は短気だ。俺は金と暴力と権力。そして女が好きだ。俺に忠誠と服従を誓うなら庇護を。逆らう奴と俺の身内に仇なす奴は問答無用で一族もろとも抹殺してその国を攻撃する。もし、まつろわぬ神で困った時は大金を用意すれば、代わりに戦ってやろう」この報告書が正しければ彼の王とは慎重な対応が必要だろう。それに王の権能の詳細は未だ不明なのだから。

## 媛巫女の謁見、アテナ襲来

草薙護堂は会談を終えてエリカ、エリカの従者アリアーナ、リリアナ、ルクレチアを従えて、ビジネスジェットに乗り帰国した。アテナの神具ゴルゴネイオンを所持して。

「今日から、ここが俺達の家だな」

俺が通っている学校近くの一軒家。現金で一括購入した物件だ。その金はウルスラグナとメルカルトを討滅した報酬金で購入。静花や明日香などのセフレにも合鍵を渡している。

「少年は金遣いが荒いな。まあ、この物件は悪くは無いが」

「リリイとアリアーナ。私、お腹が空いたわ。陛下はどうでしょうか？」

「俺も腹が減った。この家の家事はアンナとリリアナに一存するからよろしく」

「畏まりました陛下」

「仰せのままに我が王よ」

今日から楽しい魔王でハーレム生活だ！

俺の学園生活は最高だ。エリカとリリアナが編入してくれたお陰で、正に両手に花状態だ。そんな学園生活を送っているとヒロインの万里谷裕理から接触された。俺に話があるらしい。だから俺の新居に招待する事にした。エリカとリリアナには先に帰って準備するように命令していた。

「お邪魔します」

「ごつち」

俺が案内して、万里谷は俺に付いてくる。案内した先はリビングだ。

「そこに座って。それで話って?」

わかりきっているけど、聞かずにはいけない。俺の左右隣にはエリカとリリアナ控えている。アリアンナとルクレチアはテーブルの方で話を聞いていた。

「失礼いたします。草薙護堂様。私は武蔵野を守護する姫巫女の一人で万里谷裕理と申します。カンピオーネである御身との突然の謁見、大変無礼と承知ですがお許しを。私は正史編纂委員会からの依頼により、御身をカンピオーネかどうか判断する事と御身がこの国に持ち込んだ神具を見せていただきたいのです」

「なるほど。ようやくの接触か。アンナ、あれを持ってこい。それで俺は魔王という確証を得たのか?」

イタリアの魔術結社が早いというか何というか。向こうで目立ちすぎたのも大きいのか? 正史編纂委員会からの接触は最近、賢人議会で俺の事が発表されたからと思う。

「はい。私は諸事情により魔狼王ヴォバン公爵と会ったことがありません故に、御身が羅刹の化身であるカンピオーネというのは間違いない筈です。私に霊視が降りたのがその証拠でございます」

霊視。それも世界最高峰の実力を持っている。有能なサポートヒロインだ。

「陛下。お持ちしました。例の物です」

アンナが持って来たのは神具ゴルゴネイオンだ。それを万里谷に渡した。

「これは! 明らかにまつろわぬ神の神具です。カンピオーネである御身がそれに気付かない筈ありません。王よ、お答えください!」

「ああ。分かってたし、知っていたぞ」

「御身はこの国に、この東京にまつろわぬ神を呼び寄せるつもりなのですか!? 地元住民の安全を何だと思いなのですか!」

「こんな国、それに有象無象なんて俺が気にすると思っただのか？」  
まあ、美少女が死ぬのはマズイし幼女達が死ぬのも困る。可愛いは正義！

「大いなる力には、大いなる責任と義務が伴うと申し上げます。御身は、曰く付きな神具を愛人の女性にせがまれるままこの国に持ち帰るなんて？」

「黙れ。喋るな。少し他人より霊視が上手いだけの姫巫女の分際で調子に乗るなよ？ 俺が優しくすれば、つけ上がりやがって」

万里谷から、ヒツと小さな悲鳴が聞こえた。

「無礼な相手には相応の罰を。だよなあ、皆？」

満場一致の見解。これはやるしかないよなあ？ 日頃から俺から

の調教を受けているし、逆らえんから多少はね？

家族を殺すぞと脅して何十分か性的なイタズラで虐めてやった。

「少年。神具の神力が高まりつつある。そろそろ私は限界だ」

「お遊びはこれで終わりか。お前は今日から俺の命令を聞く事。いいね？ それじゃあ皆。俺は先に行ってくるよ。各自、独自行動を許可する」

楽しかった。玩具が増えたから学園生活が楽しみだなあと思いながら、俺は神具ゴルゴネイオンを持って外に出た。

俺が今回対戦するまつろわぬ神は、ギリシャ神話の智慧と戦いの女神アテナだ。容姿は銀の髪と闇色の瞳の少女。俺は原作を読んでいるから分かるが、アテナ、メドューサ、メティスの三位一体の神。正確には様々な女神の元ネタであるアテナの原型の女神。

大地と冥府を司る事から大地母神として最高位に位置しており、冥府の女王だから不死の神性と死を扱え、冥府に関係している事から闘神としての神格も獲得している。死神の鎌を主な武器とする他にも弓矢や大刀も扱い、大地からは無双の怪力を得て、それを振るう。

大地母神としての叡智で天啓や直感という形で多くの叡智や知識を得て、相手の性格や神の力を見抜く智慧の女神の権能を持っている。智慧の象徴であり冥府を行き来するとされたフクロウを従え自らも翼を生やして飛翔出来たはず。

要約すると強い女神様。あと可愛い。

俺は神具ゴルゴネイオンを持って家を出て、直感を頼りにアテナが居そうな方に走って行った。俺の家の近くでは戦いたくないからな。モブ共の家は知らん。

俺は、とあるビルの屋上で数分程度アテナを待っていた。突然、俺の直感が働くと同時にコンデイションが臨戦態勢に突入した。まつろわぬ神が近くまで来ている！ 知ってたけどね。

「あなたが、この異国の地の神殺しか？」

「ああ、そうだ。この場を借りて名乗ろう。俺の名は草薙護堂。あんたに勝つ男の名だ。覚えておけ。あんたの名前は？」

「妾に勝つと豪語するか、草薙護堂よ。やはり耳慣れぬ、異邦の男らしき名だな。その不遜な態度と名を覚えておこう。妾は闘争と智慧の女神アテナの名を所有する神である。以後、見知りおくがいい」

お互いの自己紹介は終わった。これから戦いが始まる。結果はわかりきっているがな。しかし、この戦いの先を懸念している。ただでさえ、原作の流れの間に未知のまつろわぬ神達と遭遇しているというのに、今回だけは通常通りとイカないだろう。もし新たにまつろわぬ神が乱入したら、嫁達が戦闘に巻き込まれてしまう。孕ませていないのに死んだら元も子もない。その為だけに俺がわざわざゴルゴネイオンを持っているのだから。

「さて草薙護堂よ。あなたが所持しているゴルゴネイオンを渡してもらおうか」

「断る。俺が易々とゴルゴネイオンを渡すと思ってるのか？」

「いいや。和をもって解決するか試したまで。しかし、あなたは極めて好戦的な神殺しとみた。故に我々に残された選択肢は闘争のみ」

「闘争において勝者こそ正義。筋を通すなら殺し合いが一番手っ取り早い！ 行くぞアテナ！」

「望むところだ神殺し、草薙護堂よ！」

互いに呪力と神力が高まっていく。しかし焦ってはいけな。またまサルデーニャ島では神が二柱しか現れなかったが、原作には無かったまつろわぬ神達が降臨しているという魔境に遭遇している。誰かが意図的にまつろわぬ神を招来しているに違いない。どうせグネヴィアだろ。グネヴィアに違いない。違ってもグネヴィアを犯すわ。

「生きてるだけで最高さ！　そして父なる太陽よ。我が身に日輪の加護を与え給え！」

いつも通りに波旬の権能を行使して、次に俺はインドの大英雄カルナから篡奪した権能を聖句を詠唱して行使した。天高く輝いている太陽が俺の全身を包み込んで、俺の肉体に変化が起きた。以前、カルナが装備していた鎧が俺に装着されていたのだから。

「ほう。その権能は、あの唯我の邪神からから篡奪した権能とな。それとインド大英雄カルナが授かった太陽神スーリヤの加護を受けた忌々しい太陽の鎧か」

「流石は智慧の女神か。俺が使った権能から神の名を当てるとはな。どんな権能かバレても俺は別に問題ないからな！」

何故、波旬を知っている？　それともただ単純に智慧の女神としての力でアストラル界から知識を得たのか？　まあ、いいや。恐らくこの戦いにまつろわぬ神が乱入してくるから、そいつらを殺してからアテナを捕獲してからのお楽しみだ！

アテナが漫画やアニメに出てきそうな大きな鎌で攻撃してきた。鎌からは濃密な死を感じさせられる。しかし無駄だった。波旬でブーストした状態に加えて、カルナの無敵の鎧。そしてヴリトラから篡奪した権能があるからだ。ヴリトラの権能は常時発動型なので聖句を唱える必要もない。

「忌々しい太陽の鎧に加えて、別の力を感じるぞ！」

「次はこっちからだ！　我は偉大なる神王なりて、龍蛇を討ち滅ぼす者なり！　ヤグルシ、アームールよ！　龍蛇を討滅せよ！」

メルカルトの武器であり、自動追尾してくれる魔法の棍棒ヤグルシ

とアイムール。龍蛇が居ないと行使出来ないが、俺には他の権能もあるから別に問題は無い。

ヤグルシとアイムールがアテナを狙って駆ける。アテナがそれを大鎌で軽く防いでいるが、ヤグルシとアイムールは執拗にアテナを責め続けていた。攻撃が当たれば蛇の属性を持つアテナには痛手になるはずだ！

「今度は妾の同胞を刈り取った武器とな。実に多彩な男よ。ふんっ！」

アテナがヤグルシとアイムールを防ぎつつ、俺が手加減している状態で殴り込む形でアテナとの闘争を楽しんでいる時に突然、空から莫大な神力を込められた攻撃を受けてしまった。

はあくびつくりしたわ！ 波旬のブーストとカルナの鎧で無傷余裕でしたわ！

「誰だ！ 妾と神殺しの神聖なる闘争に横やりを入れた不埒者は！」

アテナが空に向かって叫ぶ。激おこだわ。怒ったアテナもクツソ可愛いだけど！

「その態度は何なのだ。愛しい愛娘が神殺しに襲われているから、手助けしてやったというのにな？アテナよ」

直接、頭に声が届く。声はおっさんの声。死ねばいいのに。絶対に殺すわ。アテナの父親とかギリシャ神話が世界に誇るレイパーで全知全能の最高神ゼウスしかいないんです！ マジで洒落にならないんだよなあ。頭の可笑しいインド神話よりは少しはマシだけどゼウスは最強クラスの神なのだから。

「本来の妾は貴様の娘などでは無いわ！ 妾は古の世の誇り高き大地母神ぞ！ ゴルゴネイオンを取り戻し、貴様の娘に貶められた雪辱を今こそ晴らそうぞ！」

アテナが天を見上げて睨みつけた。すると白髪で白ひげで防具を着ていて右手には雷を握っており、圧倒的なまでの神威を身に纏う老神が現れた。しかし、それに呼応するかな様にゼウスと同等かそれ以上の神力の昂りを感じた。

「娘の反抗期も未知で実に愉快よ。しかし中々、しぶといではないか。普通の人間なら跡形も無く消し炭になっているというのに篡奪した権能の力とは言え、無傷とは流石は神殺しと言ったところか？ この感じは！」

「ゼウスウ！ 今度こそ我が勝利する時ぞ！」

空高く上から見下ろしているゼウスよりも更に上空に、巨大な影が現れた。その影は東京の街どころか、遙か先の見えるところまでもが日に遮られた。そして暴力的なまでに昂ぶっている神力。ヤグルシとアイムールが反応している事からして、蛇または竜の属性を持つまつろわぬ神だ。ゼウスと関係がある竜は限られている。

雲が割れて、その影の正体が現れた。空全体を覆い尽くすほどの巨大。そして上半身は巖の様な重量級の筋肉質な男で、下半身は気持が悪くなるほどの毒々しい蛇の身体が何本かに分かれている。

「不意打ちとは随分と情けない全知全能で主神様じゃないか、ええ？

流石はガチクズ集団のギリシヤ神話ですわ。取り敢えず死ね！

「デカ物も死ねね！」

実際、ゼウスとテュポーンはヤバイ。ゼウスの何がヤバいかと言えばゼウスの武器である雷霆ケラウノスだ。神話上では世界を一撃で溶解させ、全宇宙を焼き尽くすことができるらしい。やっぱり神は頭がオカシイ。早く殺さないと世界とこの世の美女達がヤバイ！テュポーンも戦闘の余波がゼウスの武器並みに被害が出るから、リススキルしますわ！

俺はアテナをヤグルシとアイムールで足止めしつつ、ゼウスに向かって空高く飛び上がる。自慢の拳なら宇宙を破壊する雷霆ケラウノスでも勝てる。

「吠えたな神殺しよ！ 余を侮辱した罪、万死に値するぞ！ 余の怒りを食らうが良い！」

ゼウスは右手の雷霆を俺に向かって投降した。今までまつろわぬ神と戦ってきたが、霸吐と相對していないまつろわぬ波旬には劣るがその次ぐらいに凄まじい莫大な神力が雷霆ケラウノスに込められていた。あくまで俺を殺す為の雷霆。この国とこの世界を滅ぼす威力ではないはずだ。加減をしているゼウスの雷霆と加減していない俺の全力ストレートなら俺の方が断然強いのだから。

俺の絶対の自信を証明するかのように、俺の拳がゼウスの雷霆ケラウノスを打ち破った。波旬の自己強化に加えて、太陽神スーリヤの鎧と邪竜ヴリトラの鱗がある限り物理と特殊な攻撃に対して完全耐性を得ている。

強靱、無敵、最強！

「余のケラウノスが破られただとお！」

「レイパー死すべし、慈悲はない！」

雷霆ケラウノス打ち破り、そのままゼウスを貫いた。圧倒的なまでの火力。その桁外れな攻撃によってゼウスは跡形も無く一撃で粉碎された。

ゼウスを一撃で粉碎したが、そのまま上空にいるまつろわぬ神、空を覆い尽くす程の巨大なテュポーンの身体を目掛けて、空中を踏んで再び加速した。突然、ゼウスが殺され次はテュポーンの番だとは思えない。

「テメエも死ねえ！」

テュポーンがどれだけ巨大で有ろうと、波旬の力の前には無力。ワパンで瞬殺だ。俺の拳がテュポーンの身体を殴るとそこから身体中に亀裂が走り、まるで暗雲が晴れる様な光景になった。太陽を遮る巨体を木っ端微塵に粉碎してやったわ。

「なんと。それがあの邪神の力というものか。あのゼウスの雷霆ケラウノスを打ち破って葬り、テュポーンですら一撃で屠る威力。妾を持つてしても即死は免れないではないか」

ヤグルシとアイムールだけではアテナ相手には不足だったか。当たれば良いダメージになるんだが。

「俺の攻撃にビビって、闘神アテナがゴルゴネイオンを諦めて尻尾を

巻いて逃げるのか？ これは傑作だな」

「妾は引かぬ！ 媚びぬ！ 省みぬ！ 妾には前進のみよ！ 行くぞ、草薙護堂！」

俺がアテナを捕獲する為の秘策を行おうとしていると、新たな神力が高まり始めたのを感じた。またかよ！

「アテナを葬るのは俺の役目だア！」

遠くから四頭の馬に戦車を引かせ、鎧をつけて槍を持っている男が大声を叫んで、こちらに迫ってきていた。

「妾を葬るだと？ それは無理だと思うがな。間抜けなお前では妾と彼には勝てんよ。アレス」

まるで可哀想な子を見るような大人の目。まあ、ギリシヤ神話でも屈指の不遇な扱いをされている主神ゼウスとその妃ヘラの息子。軍神（笑）なアレスだ。ローマ神話なら軍神マルスで良い扱いされているんだが、今回は不遇の方が来たのか。

「ゼウスとヘラの息子である俺がお前如きや神殺し程度に負けるわけないだろう！ 見ていろ！」

実際、アレスは神話でアテナに敗北している。今回は俺に敗北するけどな！ アレスが戦車から飛び上がると、アレスの神力が荒ぶって姿が100メートルを優に超える、200メートル程の巨人になった。ロボットで例えるならガンバスター並みの巨大さだ。でも敵の巨大化は死亡フラグって一番言われているからな！

「テメエ如きが俺様に勝てる訳ないだろ！ 一撃でぶっ殺してやる！」

俺はゼウスから篡奪したばかりの権能を行使する事にした。雷霆ケラウノスを波旬の自己強化でブーストしているから確実に一撃死だ！

「我は、この世を統べる全知全能たる者なり！ 我が裁きをその身に与えん！」

右手に現れた雷霆ケラウノスを莫大な呪力を込めて、アレスに向かって力一杯投げつけた。視界を遮るほどの雷光が広がり、アレスは小物臭がする断末魔を上げながら消滅した。ただの案山子ですな。

「まつろわぬ神を易々と葬るとは。貴方は私が知る中で最も規格外な神殺しよ。妾達の神聖なる決闘に何度も邪魔が入ったが、ようやく勝者を決められるよな」

しかし、また邪魔が入った。ここから東京湾の方角から、ゼウスとテュポーンには劣りアレスよりは濃い神力を存在を感じた。その存在はアテナと俺の方に近づいてきていた。しかしアテナは確実に捕らえないといけない為、先に新しく現れたまつろわぬ神を殺しに行く事にした。

「アテナ。少しだけ時間を寄せせ」

「何故に？」

「あんたも感じてるはずだ。海の方から新たなまつろわぬ神が襲来している。このままでは俺たちの決闘がまた邪魔されるから、そいつを先に殺してくる。お前との戦いが本命だから最後に誰にも邪魔されずにちゃんとケリを着けたいんだ」

「ほう。ならば少しだけ待ってやろうではないか。もし貴方が約束を違えて、逃げてしまえば妾はこの辺り一帯を石化させてやると、しかと心に刻み込んでおけ」

「物分りが良くて、本当に助かるわ」

よし！ 海から来るギリシャ神話と思われるまつろわぬ神をさつさと殺して、アテナを捕獲しようかね。

俺が東京湾の方向に、自慢の脚による加速で到着した。そこには神力によって操られている水によって構成された馬型の神獣と、それと一体化している上半身が下半身と同じく神力で操られている水で構成されている男で、右手には三つ又の銛のような穂先を持つ矛を握り締められていた。ギリシャ神話でその武器を持っている神格はポセイドン以外に考えられんわ。

「中々に大きいな、アレスよりは小さいか？ まあ、いいや」

遠くのビルからポセイドンと思わしき神を視認した俺は、取り敢えずワンパンする事にした。話すのも面倒だからな。

俺はその場から飛び上がり、ポセイドンの方に向かって空気を蹴つて、一気に加速。そしてワンパンしてやった。残されたのは神力によつて操られて海水のみ。俺の残る相手はアテナのみ！

俺はアテナがいる方に急いで戻る事にした。

「待たせたな」

「遅かったではないか？ 貴方なら直ぐに戻つてくると思つていたのだがな」

アテナは俺を馬鹿にしてんのか？ これが今から俺に敗北する地母神の嫌味か？ 邪魔が入った分アテナをサクツと捕獲しようかね。

「別に遅くても問題ないだろ？ お前が負けるのは確定してるんだからな！」

俺は一瞬でアテナとの距離を詰めて、左手で首を掴んで持ち上げた。アテナが抵抗するが波旬で自己強化している無双の怪力にはなす術ない。

そこからは俺の独壇場だった。先ずはウルスラグナの戦士の権能を行使した。そしてエリカから教授の術で教えてもらった知識をアテナの目の前だ解説してやる。アテナも声を上げて抵抗するが、煩いから腹パンして黙らせる。約3分でアテナの経歴を明らかにして、ウルスラグナの黄金の剣を万全の状態にした。

「これでチェックメイトだ」

「何故、妾だけは他の神とは違いここまで手間をかけるのだ？ 他の神々と同じ様に一撃で葬れたのではないのか？」

「それは終わってからのお楽しみだ！」

俺はアテナの首をを左手で掴んだまま、ウルスラグナの黄金の剣を腹に突き刺した。アテナは苦悶の表情は浮かべ、吐血して突き刺し

た腹からは血が流れている。これでアテナの神格を切り裂いた事によって、最後の段階に入った。

「おのれ?!」

「これでお前の神格はズタズタに切り裂かれた。これで最後だ!」

俺はカーマから篡奪した権能を行使して、弓と矢を出現させた。左手にアテナは掴んだままで、弓は捨てて背中から矢だけを取り出す。アテナの腹には黄金の剣が刺さったままだが、もう役目は終わった。「その弓矢は! やめるのだ!」

アテナは分かったのだろう。その弓矢が魅了の権能だということ。処女神アテナにはエロスの弓が効かないらしいから、手間を掛けてウルスラグナの黄金の剣を磨いでアテナの神格をズタズタにして魅了の権能を通じる様にしたのだ。

「俺の物になれ! アテナ!」

カーマの魅了の矢をアテナの心臓めがけて突き刺した。そして無尽蔵な呪力を矢に込め続ける事にした。アテナは矢の効力に抗っていたのだが、次第に敵意と殺意が剥き出しだった瞳から戦意が消え失せてたが、アテナは最後の抵抗で目を閉じた。

「閉じるなよ!」

俺は矢から手を離して、アテナが目を閉じているのを無理矢理に瞼を開けさせて俺の顔を見せてやった。

「あまり妾の顔を見つめないでくれないか? 流石に照れてしまう。それにこの首の痛みも辛いが、弓矢と剣が刺さったままなのも痛いので抜いて欲しいのだが、お願い出来ないだろうか? 別に貴方に乱暴な事をされるのが嫌いな訳じゃないぞ」

完全勝利UCだな! あれだけ酷いことをされてプライドが高いアテナが、俺に媚びるはずがない! モジモジしているアテナが可愛いなあ。家のベッドでたつぷりと可愛がろう!